Véronique Altglas（ヴェロニク・アルトグラス）先生講演会
New Religious Movements of the Counterculture and Spirituality in Euro-American Societies
（カウンターカルチャーの新宗教運動と欧米社会におけるスピリチュアリティ）

2024 年 11 月 28 日（木）10:30-12:10
法文 1 号館 115 教室

北アイルランド・クイーンズ大学ベルファストで教鞭をとられている宗教社会学者のヴェロニク・アルトグラス先生に、1960～70 年代の欧米社会における新宗教運動やスピリチュアリティについてご講演いただきました。

アルトグラス先生は、現代社会の合理化の行き過ぎに対する反応としてカウンターカルチャーが台頭し、新しい宗教意識が広まる 1960 年代を欧米社会の宗教史の転換点と位置づけています。カウンターカルチャーから生れた新宗教運動は、宗教の復興や、古い信仰と新しい宗教の置換ととらえるのではなく、進行中の世俗化の過程の結果として、合理化に対する抵抗が宗教的な形で表現されたものであるとされます。

現代の欧米社会の新しいスピリチュアリティについては、これまでの宗教社会学の研究では、制度的宗教の規則や規範から離れ、主観的体験を重視し、自己を権威化するものであるとされてきました。その結果、スピリチュアリティが宗教にとって代わる「スピリチュアル革命」が起きていると考えられてきました。

しかし、アルトグラス先生が提示する西洋のカバラー・センターやネオ・ヒンドゥーイズムのセンターの豊富な事例からは、異なる視点が提示されます。スピリチュアリティの探求者とその指導者たちの間では、自己実現に対する責任が強調され、自主的選択に委ねられる一方で、厳格な規範も求められています。また、ある権威の存在のもと、絶えず自己観察や自己規律化が継続されていることが明らかにされました。このスピリチュアリティの探求者と指導者は、個人の感情や思考を自己規律化することを求めているのであり、スピリチュアリティが自己を権威化し、宗教にとって代わるという「スピリチュアル革命」は、アルトグラス先生の結論によれば「起きていない」とされています。さらに、アルトグラス先生は、自己実現・自己規律を求めるスピリチュアリティは、現代の新自由主義的な政治的・経済的メカニズムと親和性がある社会的規範や義務と共鳴するものであると指摘しています。

今回ご講演されたアルトグラス先生のフィールドワークに基づく欧米のスピリチュアリティについての議論は大変に刺激的なものであり、参加した院生との間で活発な議論が交わされました。

文責：輝元泰文